

2016年度JROAD公募研究一覧

項番	課題名	概要
2016-01	急性心筋梗塞患者における、施設間における在院日数のばらつきと、それに関係する要因についての研究	虚血性心臓病で入院した患者において、施設間における平均在院日数のばらつきの現状を明らかにする。またばらつきに影響を及ぼす要因を明らかにする。
2016-03	日英間急性心不全症例におけるガイドラインベース治療実施状況と短期予後に関する国際間比較研究	急性心不全の治療目標は短期的な生命危機回避と同時に、心不全進行ステージに応じたGLベースの治療を追加、見直しを行うことにある。今日汎用されている心不全GLは主に欧米人を対象とした臨床研究を基準に作成され、本邦を含めたアジア諸国でも使用されているが、小～中規模疫学データの国際比較から、人種、医療文化そして年齢分布も欧米と異なる本邦ではGL遵守率が低い一方で、予後は比較的良好とする報告が散見される。しかしながら、大部分は論文間の間接的な比較であり、研究時期も異なるため、真実を反映していない可能性がある。したがって、真の相違を明らかにするためには、国際間でNationwideの大規模Adminデータを用い、同一条件による対象症例の選定、同一アウトカムに対する統計学的処理による、国際間直接比較研究が必要である。本研究は、日英国際間の急性心不全におけるガイドライン（GL）ベース治療実施状況と短期予後の相違を明らかにすることを目的とする。
2016-04	破裂大動脈瘤に対する治療方針と予後に影響を与える因子の検討	高齢化に伴い、本邦における大動脈瘤の患者数は増加している。破裂性大動脈瘤の死亡率は、依然として高く、病院へ到着した患者でも死亡率は、40-70%とされており、解決が重要な課題である。近年ステントグラフト治療の導入に伴い、破裂例において従来の手術からステントグラフトへ治療の主流が移りつつあるが、一方で限られた施設でしか行われないと推定される。JROAD-DPCデータベースは、本邦の主な施設を網羅していると考えられ、十分な症例数が見込まれる。このデータベースを用いて破裂性大動脈瘤に対する治療の現状を明らかにし、予後に影響を与える因子を検討する。
2016-05	急性大動脈解離のEvidence Practice Gapの可視化を行うための指標の作成と測定に関する研究	急性大動脈解離は発症が急性であり致死率が高く、重篤な循環器救急疾患の一つである。しかしながら、先行研究からの報告では発生率は10万人年あたり10人と高くなく、本邦においてはその診療実態は不明な点が多い。他の循環器疾患では、エビデンスと診療実態に解離があることが判明しており（Evidence-Practice Gap）、このEvidence Practice Gapの可視化し縮小化することで診療の質を均てん化・向上させる試みが行われている。急性大動脈解離は本邦においても診療ガイドラインが整備されているが、診療の質を測定する指標は未確立であり、Evidence Practice Gapの可視化は行われていない。本研究では、急性大動脈解離の診療の質指標（Quality Indicator）を測定し、Evidence Practice Gapを可視化することを目的とする。
2016-06	全国的レジストリーによる循環器疾患および脳卒中の実態把握の確立と両疾患合併例に関する研究	世界に例をみない速度で進む超高齢社会の本邦において、脳卒中、心筋梗塞の医療の整備は喫緊の課題である。心臓血管疾患は日本人の死因の25.5%を占め、国民医療費の約20%を循環器病が占め、後遺障害による寝たきりを招来する脳卒中の救急医療の整備は喫緊の課題である。しかし公的疾患統計の患者調査は、全国の施設からサンプリングした病院における10月の1日間の入院外来患者数をもとにしているため、再入院は計測不能であり、季節変動の大きい循環器疾患の特性から正確ではない。事実患者調査における心筋梗塞、心不全の入院症例数は、4,200例、30,700例と報告されているが、同年度の循環器学会の行っているJROAD-DPC調査からは過小評価されている（2012年度の心筋梗塞、心不全の入院症例数はそれぞれ69,235例、212,795例）本邦における脳卒中を含む循環器医療の全体像を可視化するため、既存の代表的循環器疾患レジストリー間の相互連携をふかめ、脳卒中循環器疾患にまたがるレジストリーを構築する。我が国における脳卒中、循環器疾患の入院症例数、死亡数、転帰などの正確な疾病負担を明らかにする。更に循環器疾患発症後の脳卒中発症、脳卒中発症後の循環器疾患発症率など複雑な病態についての検討を行う。
2016-07	本邦における大気汚染と循環器疾患の発症の関連	欧米を中心に、高濃度の粒子状物質曝露が循環器疾患に影響を及ぼすことが報告されているが、本邦における大気汚染が循環器疾患発症に及ぼす知見は非常に乏しい。本研究は、国立環境研究所（National Institute of Environmental Studies）が提供する大気汚染データベースとJROAD-DPCデータとリンクから大気汚染が循環器疾患の発症に及ぼす影響について疫学的手法を用いて明らかにすることを目的とする。本研究は、大気汚染と高感受性の心疾患ならびに地域を解明し、大気汚染高濃度時における警告や心疾患発症抑制に重視した未然防止の観点に立って、基礎的な知見を提供することができる。
2016-09	超高齢化社会における急性心筋梗塞患者に対する経皮的冠動脈インターベンション治療の費用対効果に関する研究	本研究では、JROAD及びJROAD-DPCデータを活用することにより、現在の本邦における急性心筋梗塞患者に対するPCI治療が高齢患者に対して有効な費用対効果を示しているかを検証する。

2016-10	循環器疾患における入院医療費と期間、その規程因子と地域格差について	わが国において心疾患は、死因第2位であり、医療費全体に占める割合は、20.1%で最も大きい。現在、心不全による死亡患者数は、7万人を超え、今後も人口の高齢化に伴い心不全患者は増加し、医療費も増加していくことが予想される。本研究の目的は、循環器疾患1人あたりの入院医療費と期間をそして、それらの規定因子を地域別や疾患別で調査をおこない、より経済的に効率的な医療をおこなうために必要な情報が得られる。
2016-11	高齢心不全患者における医療アクセスの実態と予後との関係	心不全患者におけるフレイルには、悪液質、サルコペニアなど身体的側面、認知機能など精神的側面、そして独居、社会的孤立などの社会的側面が含まれるが、その中で社会的フレイルに関するエビデンスは非常に少ない。都市部および地方における高度医療施設へのアクセスが社会的フレイルの一要因として高齢心不全患者の与ばにどうかかわるかが明確になれば特に地方におけるアクセス向上が高齢心不全患者の予後改善に寄与する可能性が示唆される。
2016-12	本邦における循環器疾患に対する入院時ADLの意義と実態調査	超高齢社会の本邦において、疾患や患者背景により、患者ADLが予後と密接に関連している可能性がある。また在院日数の長期化が医療費膨大の一因として問題となる。本研究は、入院時ADLスコアが循環器疾患において患者背景別に予後や在院日数と関連するかを検討する。
2016-13	心不全の新規医療の質指標（QI:quality indicator）の開発	循環器疾患診療実態調査（JROAD）から我国の心不全年間入院患者総数は20万人を超えることが明らかになり、関連する治療費は1兆円を超えると推計されている。他に類を見ない急速な高齢化が進む我国では、心不全患者への対処は大きな課題である。心不全に関しては、諸外国では「医療の質指標(QI:quality indicator)」をもとにすでに全国的な検討が行われてきた。ACE/ARB処方や入院時の左心機能評価の遵守率の高い施設では死亡率が30%減少したこと、米国の公的医療保険制度でPay for Performanceによる質評価制度導入後QI順守率が向上したこと、英国でも同様であることが報告された。心不全に関するQI評価の試みは我国では限定的で全国レベルでの調査が必要である。本研究では我が国における心不全患者の再入院についての実態把握を行い、再入院に関連する因子を明らかにすること。さらに、我が国における心不全患者診療において、入院中の予後また再入院と関連する医療の質指標(QI:quality indicator)の開発を行う。
2016-14	JROAD-DPCを用いた本邦における静脈血栓症に対する下大静脈フィルター使用と転帰に関する研究	VTEの生命予後は、急性PEによる死亡を反映する。急性PEは、しばしば再発を起こし、これが呼吸・循環系全体の急激な悪化の原因となる。下大静脈（IVC）フィルターは、血栓そのものに対する治療ではなく、またDVTの予防やその進展を防止するものではないが、急性PEの一次ないし二次予防法として臨床に必要な医療機器として位置づけられている。しかしその適応には十分なエビデンスはない。本研究ではVTE患者に対する急性PE発症抑制目的のIVCフィルター挿入使用が退院時転帰と関連するかを検討する。
2016-15	既存データベースの活用による虚血性心疾患・大動脈疾患診療の実態把握ならびに医療体制構築に向けた指標の確立のための研究	本邦の死因において第二位を占める循環器疾患の中で最も重要な虚血性心疾患・大動脈疾患の医療体制の整備のため、JROADおよびJROAD-DPCデータを参考に各疾患の実態調査及び指標の構築を目的とする。
2016-16	急性心筋梗塞診療における医療アクセスの実態と予後に与える影響の検討	都市部および地方における高度医療施設へのアクセスが社会的フレイルの一要因として高齢心筋梗塞患者の予後にどうかかわるかが明らかになれば特に地方におけるアクセス向上が高齢急性心筋梗塞患者の予後改善に寄与する可能性が示唆される。